

細見家の仔細

細見 有太(太) ほそみ ゆうた

・細見家長男。太っている。高校生。

細見 亮太 ほそみ りょうた

・細見家次男。細身。中学生。子供。

細見 晴夫 ほそみ はるお

・細見家父。細身。優しい。

細見 京 ほそみ みやこ

・細見家妻。細身。

細見 有太(筋) ほそみ ゆうた

・有太ダイエットに成功(しすぎた)姿。幾多の悲しみを乗り越え筋繊維を身に纏った彼に、敵はない。ゴリゴリマッチョ。

メモ(提出の際に削除)

役作りに重点を置く。

亮太、晴夫、京は細身であることが望ましいが、極端に太っていたり筋骨隆々出なければそれでよし。

役作りには「体作り」も含まれる。

台詞を100%覚えるのではなく、暗記は80%までに留めて残りの20%は役作り及び

稽古で作り上げていく。

テーマはあるがメッセージはない。

テーマは「家族の条件」と「」。

テーマの全貌は観客にばれない様にする。その一歩手前までを描き、残りをそれぞれに考えてもらうのがベスト。

役作りの際、自分史は共有させない。(キャラが知らない事実)

場転に関して是要相談。

ギャグ及び、シリアスパートの台詞は役者と要相談。(役者の気持ち作りの程度によっては丸投げ)。

メソッド演技法（擬き）。

指示は解り易く。

照明、音響の決定はシーン練と並行しながら（可能ならば）

演出の仕事は方向性と物語としてのテンション（重さ、起伏）の調整。

求めるのは「関係性のリアルさ」

求める演技の性格上、役者に求めるのは演技力より役に対するアプローチの考え方（ほかの役者の『役作り』に極端に文句を言うような人はNG。オーディションの段階で確認／※さすがに程度はある）

インプロを定期的にやる。

最終決定権は演出。弱気にならない。

心を強く持つ。

偶にはおいしいものを食べる。

自分へのご褒美は忘れない。

時たま夢女子OLみたいなノリで自分を甘やかす。

全ての作業を完全にコントロールしようとしなない。

役者の案（特にギャグシーン）は積極的に取り入れる。

死ぬ気でやるな殺す気でやれ。

エチュードでいいものが生まれそうなきは悔しがらずに取り入れる。

脚本は「指南書」であって「設計図」ではない。

自分のギャグセンスを過度に信じない。

DON'T THINK FEEL

ここは閑静な住宅街にあるごく普通の一般家庭『細見家』のリビング。

上手側には扉。机と四つの椅子。電話機。キッチンからはのぞける小窓がある。そこでは晴夫が新聞を読んでおり、京が小窓を閉じた向こうで料理をしている。二人とも白ベースのＴシャツと黒ジャージの下を着ている

京、小窓を開けて有太と亮太を呼ぶ。

京 ゆうたー！ りょうたー！ ご飯できたわよー！

階段を降りる音。

亮太が制服のジャケットを持ってリビングに入ってくる。
制服の下を履き、表に「細見」とプリントされたＴシャツを着ている。

亮太 おはよう。お、この臭い！今日は目玉焼きとお味噌汁だ！

晴夫、新聞を畳む。Ｔシャツには「細見」とプリントされている。

晴夫 いつもと同じだろ。

亮太 いつも同じだからこそ、今日くらいは気分変えたいの。(テレビの電源をつける)

京 私が作る朝ごはんは何か不満でも？

京、料理の乗せられた皿を小窓から亮太に渡す。

ここで初めて亮太の背中が見える。そこには「天ぷら」。

京がキッチンからリビングに出てくる。Ｔシャツの表には「細見」とプリントされている。

京 あら？ 有太は？

亮太 まだ寝てるよ。兄ちゃんどんなに声かけても全然置きやしないんだ。お、今日は晴れか。

京 全くもう、あの子ったら。・・・もう先に食べちゃいませよ。

晴夫 そうだな。それじゃあ、手を合わせて。

三人 いただきます。

三人とも、まったく同じ動きで朝食に手をつける。

三人が同時に醬油に手を伸ばしたところで、三人が目を合わせ笑いあう。

京　　ふふふ、やっぱり私たちって似てるわね。
亮太　そりゃあ似てるよ。だって家族なんだから。

三人とも、もう一度笑いあう。

ドアの外から階段を降り音が聞こえてくる。さつきより明らかに大きい。
乱暴にドアが開けられる。

有太が入ってくる。他の三人と比べて明らかに太い。Tシャツも同じく「細見」とプリントされているが、サイズが全く合っていない。腹が半分見えている。

有太　なんで起こしてくれなかったの!?

亮太　ああ、おはよう。兄ちゃん。

有太　おはよう……じゃないよ！おい亮太！なんで起こしてくれなかったんだよ！式の準備があるんだぞ！

亮太　何回も声かけただろ。それでも兄ちゃんが起きなかったんじゃない。

京　有太もいいかげん自分で起きれるようになりなさい。もう3年生でしょ？

有太　じゃあいいかげん携帯買ってよ！そしたらアラームかけて自分で起きれるから！

晴夫　だめだ。お前にはまだ早い。

有太　えーなんでー!？クラスの中で持っていないの僕だけなんだよ!?

京　よそはよそ、うちはうちよ。あつ。

京、何かを思いだしてキッチンの方へ行く。この時初めて京の背中が見える。そこには「サラスパ」と書かれている。

有太　なんだよそれ。(朝食に手を伸ばそうとする)

京　そんなことより、有太、ちよっと手伝って。

有太　はあ……。なに？(途中でやめる)

京　上の棚にあるお鍋とって。夜ご飯作るのに使いたんだけど届かないの。

有太　取るから携帯買ってよ。

京　馬鹿言わない。ほら、早く!

有太　僕遅刻しそうなんだけどー

京　自業自得でしょ。

有太、しぶしぶキッチンの方に鍋を取りに行く

この時初めて有太の背中が見える。背中には「ビュツフェ」とプリントされている

有太 テレビを見ている。

有太 どのなべー？

京 一番大きいの。今日カレーだから。

有太 カレー！？ やった！！

京 あんたカレーの度にそれ言ってるわね。あ、それ、その鍋！

有太 え、これ？

京 違う違う、その横。

有太 これか。

京 違うって、その右！

亮太、テレビの音が聞こえずにイライラしている。

有太 え、じゃあこれ？

京 だから違う！！ あんた馬鹿なの！！

有太 うるさいな！！ てか、そもそも何で自分が届かないようなところに直してんの！！

亮太 さつきからうるさい！ テレビの音が聞こえないじゃん！

亮太、小窓を開ける。

そこにはちょうど有太のお腹が。

有太 そんなこと言ったってしょうがないだろ！ どこにあるかわかんないんだから！

(しゃべりに合わせてお腹を揺らす)

亮太 にしてももう少し静かにやれるだろ！

有太 棚の中に頭突っ込んでるから声張らないと聞こえないんだよ！ (しゃべりに合わせてお腹を揺らす)

亮太 知らねえよ！ こっちはテレビみ——腹揺らすのやめろよ！ イライラする！！

有太 あ！ あった！ これでしょ！？

京 そうそう！ これこれ！ いやー助かったわ。

有太 助かった？ なら携帯買ってよ！

京 だから駄目だって。

三人とも席に着く。

有太 母さんさつき言ってたじゃん。僕もう高校三年生だよ？ 携帯くらい持ってもいいじゃん！

京 それならさつき母さんも言ったでしょ？ よそはよそ、うちがうち。

有太 いっつもそれだもん…。

亮太 兄ちゃん。もうあきらめた方がいいよ。もう何回も言ってるじゃん。

有太 …あ、じゃあせめてこのTシャツだけでもどうにかしてよ！

亮太 ああ、それは思った。

晴夫 だめだ。(迫力強めに)

有太 い、いいじゃんかよ！

晴夫 だめだ。いいか、このTシャツは我が家で代々伝わる文化で、言わば我が家にとつてのユニフォームなんだぞ。前面には我が家の家名、背中には各々が週替わりでお題に沿った好きな物を、今週は「食べ物」――

亮太 どんな文化だよ！ てかTシャツって！ わりと最近の文化じゃねえか！

京 有太、亮太、父さんにくら言ったって無駄よ。私が嫁ぐ時も何度も言ってるけども駄目だったんだからったんだから。

晴夫 とにかく、我が家の文化だ。そうやすやすとやめられるものじゃない。

京 (有太と亮太に向かって) ね？ 何言ってもなしのつぶてなんだから、言うだけ損よ。

有太と亮太、諦めたように朝食に戻る。

京 …それより有太、あんたいいの？ ゆっくりしてて。遅刻しそうなんですよ。

有太 え？ (朝食に手を伸ばそうとしてまたギリギリでやめる) あー！！ そうだった！

あーもう！ 準備しなきゃ！

京 あ、ちよつと！ 朝ごはんは！？

有太 あー…もう食べてる時間ないから！ 今日はいい！！

有太、大慌てで部屋から出ていく。

晴夫 朝から慌ただしいな…。

京 亮太は学校の時間大丈夫なの？

亮太 もがもがふがふがもがもが。(なにを言っているかわからない)

京 飲み込んでから話さない。

亮太 (飲み込む) 入学式は午後からだから。(もう一度ご飯を頬張る)

晴夫 仕度するの早すぎないか？ 午後からならもっとゆっくりでいいだろ。

亮 もがもがふがふがもがもが。(なにを言っているかわからない)

晴夫 飲み込んでから話さない！

亮太 (飲み込む) ほら、今日って入学式じゃん？ ちょっと気合入っちゃって。(またご飯を頬張る)

京 有太と同じ高校だからって張り切っちゃってるのよ。

晴夫 汚したりしないようにしろよ。…というか、まさかあんなに馬鹿だった亮太が、有太と同じ学校に入れるまでになるとはな。きっと京に似たんだろうな。

京 そんな…きっと晴夫さんに似たのよ。

晴夫 京…

京 晴夫さん…

京、晴夫なんかイチャイチャした雰囲気。お互いを誉めあってる。
亮太、二人の会話を聞いて嫌そうな顔をしている。

亮太 (咳払い)

京 どうしたの？

亮太 もがもがふがふがもがもが。(なにを言っているかわからない)

晴夫 京 飲み込んでから話さない！

亮太 (飲み込む) 朝からイチャイチャすんな！ 歳考えろよ！

京 別にいいじゃない。年なんて関係ないわよ。ね、晴夫さん？

晴夫 そうだな、京。

亮太 (晴夫たちの声をかき消すように) あー！ 朝の占いやってる！ おー！！ 兄ちゃーん！！ A型二位だってよ！！

階段を降りる音。

有太が入ってくる。制服のズボンを半分だけ履きながら学ランの片方にだけ袖を通し、顔には洗顔の泡。右手に歯ブラシ、左手には櫛を持っている。

有太 マジで！？ おお！ ほんとだ！

亮太 何があった！？

有太 え？ ああ、急いで準備してた。

亮太 急ぎ過ぎだよ！

京 あら、つてことは私と晴夫さんも一位ね。

有太 おお！！ 恋愛運は星5だって！！

京 よかったじゃない。あんたもしかしたら新入生といい出会いがあるかもしれないわよ。

有太 後輩かー。…ありだな。

亮太 おれも新入生の子と…

晴夫 お前は分かんないだろ。まだ血液型測ってないんだから。

亮太 父さんと母さんと兄ちゃん三人とも血液型同じなんでしょ？絶対俺も同じだつて！

有太 確かにそうかもしれないけど、お前だってもう高校生だろ？いいかげん病院行って血抜いて検査してこいよ。

亮太 それはそうなんだけど…。ほら、注射ってなんかこう…怖いじゃん？

有太 うわ、子供じゃん。(席について朝食に手を伸ばそうとする)

亮太 べ、別にいいじゃんかよ。怖いもんは怖いんだよ。ってか、兄ちゃんはいいのかよ！

有太 へ？

亮太 時間だよ！時間！！遅刻しそうなんだろ！？

有太 ……そうだ、こんなことしてる場合じゃないんだ！準備してくる！

亮太、部屋から出て行く。

3人とも食事を再開する。

晴夫 慌ただしいな…

亮太 あのさ。(ご飯を食べながら、何気なく)

京 どうしたの？

亮太 なんで兄ちゃんだけ似てないの？

晴夫、なぜか焦りだす。

京 なによ、急に。(なにをおかしなことを、みたいな感じ。軽い感じで。)

亮太 いや、なんかさ。母さんと父さんと僕は似てるじゃん？顔こそ似てはいないけど、体型とか。仕草とか。特に体型はお爺ちゃんとかお婆ちゃんとか、親戚一同みんな痩せてるのに、兄ちゃんだけやけに、こう…：：：恰幅が…

京 太ってるもんな。

亮太 もうちよつと伏せて言えよ！

京 そんなことないわよ。私は晴夫さんと有太、すごく似てると思うわよ。

晴夫 そ、そうか…？あ、もう時間だ。会社行かないと！

京 あら、そうなの？やけに早いのね。

晴夫 あー、朝から会議があるから。じゃあ、行ってきます。

晴夫、焦りながらシャツを着て、ジャケットを持って出て行く。

亮太　なんか焦ってたね。

京　なんででしょうね。それよりほら、朝ごはん早く食べちゃいなさい。もう全部洗っちゃうから。

亮太　もう食べ終わったよ。

京　はやっ！…あっそうだ

亮太、裏に食器を運ぶ。

京、亮太と入れ替わりで机のところまで出て、椅子をを上手の方に動かし、客席に向かっておく。

京　亮太、食器置いたらちょっとこっち手伝って

亮太　わかったー。…って何してんの!?

京　見たらわかるでしょ模様替え。男手がみんないなくなる前にやっちゃおうと思っ
て。ほらそれ動かして。

亮太　わ、わかった!

亮太、机を下手に動かす。

京　そうだ、あんたの部屋に使ってない本棚あったでしょ？あれ持ってきて。

亮太　わかった。

亮太、扉から出て行く。

京、亮太が置いていった学ランの上を着る。

チャイムの音。

京、窓に板をはめ込む。そこには入学式のスケジュールが書いてある

この瞬間、この場所は入学式の会場になり、京は男子生徒になる。机は壇、椅子は入学者席。

舞台奥から有太が入ってくる

有太　ああ、もうすぐ始まるから。準備、切り上げていいよ。

生徒　わかった。そっちもそろそろ準備しといて。

有太　了解。

有太、ニコニコしている。

生徒、はける。

亮太、入れ替わりで入ってくる。にやにやしている。

亮太 兄ちゃん。

有太 うお！！ 何してんだ亮太！ まだ時間じゃないだろ！！

亮太 へへ、楽しみすぎて、早く来ちゃった。

有太 早すぎだろ！ ていうかそもそも生徒会以外はまだ入っちゃいけないんだぞ！ 教室で待機してろよ。

亮太 まあまあ、いいじゃん。「生徒会長」様の身内ってことで。

有太 お前ってやつは……

亮太 へへへ……っていうか兄ちゃん。

有太 ん？ どうした？

亮太 さっきの娘って誰？

有太 だれって、うちの生徒会のメンバーだよ。

亮太 なかなかいい娘だったね

有太 さっきから「いい子」「いい子」って、生徒会のメンバーってことはお前の先輩だぞ？

亮太 そういう意味の「いい子」じゃないよ。恋愛対象としての「いい娘」。

有太 にしてもおかしいだろ。あいつは男だぞ。

亮太 え？ そうなの？

有太 学ラン来てたろ。

亮太 だからって……

有太 そういうもんなんだよ。

亮太 はあ、あんなに可愛いのに……。っっていうか。

有太 なんだよ。

亮太 女の子じゃないなら、なんであんなに嬉しそうにしたの？

有太 別に女の子じゃなくても、友達と話したらあんなふうになるだろ。

亮太 そうかなあ……。そんなことないけどなあ。

有太 そりゃあ、お前は友達がたくさんいるからそうかもしれないけど

亮太 ん？ なんて？

有太 いやいや何でもない。……っていうか、もうすぐ式始まるぞ。席に座ってる。

亮太 あ、ほんとだ生徒が入ってきてる。

亮太、席に座る。

隣に二人の生徒が（生徒2・生徒3。亮太、有太・京以外が兼役）座る

有太、女の人と話しているマイム（もしかしたら誰かに（兼役ではなく）やっってもらったかも）。少し照れてる。

亮太　　なんだいるんじゃん。いい娘。

亮太、横の二人の方と軽く話をする。
チャイムの音。

3人とも佇まいを直す。

これから入学式が始まる。3人はマイムでリアクションをする。

亮太、壇の横に有太がいるのを見つけて小さく手を振る。

有太、それに気付き、小さいジェスチャーで制する。している内に名前を呼ばれ（マイム）、慌てて返事をして登壇する。

有太、緊張しているのか、話しながら何度も顔をハンカチで拭う。

有太　　えー、どうも皆さんこんにちは。只今ご紹介に与りました。この学校で生徒会長を務めさせて頂いております。細見 有太と申します。この学校の生徒の代表として歓迎の句を述べさせていただくべく、壇上にながらせていただいた次第です。
本日、皆様は新しい門出ということで、不安の中でこの会場までおk――

亮太、有太に向かって大きく手を振る。

有太、慌てて何度か咳払いをするが一向に辞めないで、しびれを切らして手を下ろすようにジェスチャーをする。

亮太、不服そうに手を下ろす。

有太　　（咳払い）―― 失礼しました。――

有太、気を取り直して話し始める。（マイム）

亮太　　なんだよ……。振り返すくらいしてくれてもいいじゃん……。

亮太、不貞腐れながら項垂れて話を聞いている。

生徒2、生徒3が壇上を指差しながら笑い交じりに何か話している

亮太　　え？なにになに？ 何がおかしいの？

生徒2、3、意地の悪そうな顔をして有太を指差す。

亮太　　あ、あの今スピーチしてる人？ あの人僕のお兄ちゃんなんだ！

生徒2，3、驚き、ばつの悪そうな顔をする。

亮太、それに気付かず話を続ける。

亮太 兄ちゃんってすごいんだよ。一年生の時から生徒会に入っていて、定期試験の学年順位はいつでも一位で、

生徒2，3、亮太に引いてる。

有太、亮太が何か話しているのに気付く。

亮太 その上、(何かしらの誉め言葉)――――

有太 ゝん、ん(咳払い)！！

亮太 しかも、(何かしらの誉め言葉)――――

有太 ゝん、ん(少し照れた後に咳払い)！！

亮太 さらに(ただの悪口〈※見る側にひかれないように注意〉)

有太 せめて誉めろよ！

全員の視線が一斉に有太の方に向く。

有太 (かなり戸惑いながら)せ、「せめて誉めろよ！」と、見返りを求めてしまうこともあるでしょうが、そんな風に安直には考えずに、自分と向き合って学校生活を送っていきましょう。

有太、焦って礼をしながら退場する。

亮太、アホな顔で拍手をしている。

亮太 いやー、さすが兄ちゃんだ。ナイススピーチ。

亮太、上手側の扉を開けて入ってくる。

有太 お前ちよつとこっち来い！！

亮太 は！？ あ！ 兄ちゃん！ なになに！？

亮太、上手側の入り口から有太を引っ張り出す。
舞台上にいる人間だけで椅子と机を移動。

その場は入学式会場の裏になる。

亮太、有太を引っ張りながら舞台奥から登場。

亮太 痛い痛い、痛いって！なんだよ兄ちゃん！まだ入学式の途中だろ！……って、ここ舞台裏！？ すごい！

有太 別に凄くないよ。なんならうちの学校はかなり小さいほうだ……じゃねえよ！

亮太 うお！！なんだよ急にうっさいな。

有太 うっさいな、じゃねえんだよ！

亮太 静かにしとかないと外に聞こえるって！

有太 (ハッとして若干声を押えて) この際ある程度のお喋りには目を瞑る。けどあんまり大きな声では話すな！！

亮太 そんなに騒いでないって。ちょこっと話しただけ。

有太 あれがちよつとの音量かよ……

亮太 お、何この縄、解いていい？

亮太、シズにつないである縄を勝手に解く(マイム)

有太 いいわけないだろ！！

有太、縄に飛びつき何とか食い止める(マイム)。

亮太 おお！

有太 おおじゃねえよ！なんで来たことのない場所の初めて見た重りに繋ぎ留めてある縄をそんな勝手に解けるんだよ！？(マイム)

亮太 勝手じゃないよ。聞いたじゃん。

有太 許可、だして、ないだろ！ちよつと、結べ！

亮太 あ、こっちのも解いていい？(隣のシズを指差しながら)

有太 いいわけないだろ！いいからこっち来て結べ！

亮太 えーもう、(マイムで結びながら)人使い荒いんだから。

有太、シズから恐る恐る離れる。

亮太 で、なに？

有太 は？

亮太 だから、ここに引っ張て来た理由だよ。

有太 あーそうだそうだ！お前、俺が話してる途中で喋り過ぎなんだよ！

亮太 そんなこと言ったって、僕以外にも喋ってる人いたよ。

有太 よそはよそ、うちはうち！

亮太 兄ちゃんまでそれかよ……。あーじゃあいいよ！確かに喋ったのは俺が悪かったよ！兄ちゃんの自慢をしすぎた！ごめん。

有太 最後の方は思いつき悪口だったけどな。

亮太 でもその代わり、あいつら、俺の隣に座ってた奴も叱ってくれよ！？

有太 ……どんなこと喋ってた。

亮太 どんな事って……。よくわかんないけど、なんか笑ってたよ。

有太 そうか……。

亮太 兄ちゃん？

有太 ……：わかった。そいつらもあとでしっかり叱っておく。

亮太 そ、そう？ ならいいや……。あつ！ そうだ！！

有太 ……！なんだようるさいな！

亮太 (有太に近づいて) なんだよ兄ちゃん。いい娘、居るんじゃない。

有太 だから、さっきも言っただろ。あいつは男だって

亮太 その子じゃないよ。俺と別れた後に話してたあの娘。

有太、明らかに焦った顔をする。

有太 し、知らねえよ。ただの生徒会の一員だよ。

亮太 ああ、もういいやなんかその言い方で察した。

有太 (急に亮太に寄る) 何を察したって言うんだよ！ もっと食いつけよ聞いて来いよ！

亮太 うわ、なんだよ。急に、聞いてほしくなさそうだったじゃんかよ。

有太 あれはそういうポーズだろ。お約束じゃん。

亮太 あー、どうせあれだろ、「生徒会の仕事をして仲良くなってくうちに惚れちゃって、でも今の関係も心地いいからなかなか告白できない」、みたいな感じだろ？

有太 (大仰に) な、なんでわかった。

亮太 (カッコつけて) 兄ちゃんと違って恋多き男なんだよ。

有太 かっこいい……！

亮太 なんちゃっ——

有太 なあ、教えてくれよ！

亮太 ……え、なにを？

有太 恋の手ほどきだよ。なあ、俺どうすればいいと思う？

亮太 いや、だから俺は——

有太 もつたいぶってないで！ な？

亮太 あーもう！ うつとおしいな！ 男なら当たって砕けろ！ 告白だ告白！

有太 告白！？ いや、さすがにそれは……。ちよつと早いつて言うか……

亮太 その「ちよつと早い」が今のこの現状を招いてるんだろ！兄ちゃん（有太の眼を

見ながら）、人間、明日から頑張ろうじゃだめだ。今日から変わらなきゃ！

有太 亮太：：！そうだよな！今日から変わらなきゃな！よし決めた！！俺は今から彼女に告白する！！副会長に告白するぞ！！

ちよつと壇上に立っていた副会長と、話を聞いていた生徒たちが、有太の声に反応して、舞台裏の方を見ている。

亮太 ちよ、ちよつと騒ぎ過ぎなんじゃない？

有太 うおおおおお！！

有太、中央奥からハケる。

亮太 ちよつと、兄ちゃん！？

亮太、有太を追いかけてハケる。

舞台上に残っている人間で場転。細見家のリビングになる。時間は夕方。

場転をしていた人間のうち、晴夫だけ椅子に残って誰かからの手紙を読んでいる。

有太、上手から登場。走ってきたのか、ひどく疲れている。

有太 ただいまー。：：あれ、父さん、何してんの？

晴夫 いや、別に、何にも。（読んでいたものをたたみ、机の上に置く）

有太 ……あ、そう。

晴夫、どことなく慌てている。

晴夫 ちよつと、父さん出ないといけないから。

有太 え？こんな時間から？

晴夫 ちよつと母さんの実家に行かないといけないから。（部屋から出て行く）

有太 ああ、行ってらっしゃい。

有太、晴夫が机の上に手紙を忘れているのに気づく。

有太 あ、ちよつと、忘れてるよ！！

玄関の扉が閉まる音。

有太 まあ、いいか。返ってきてから渡そう。

有太、一息つくが思いだして慌てる。

有太 そうだ……！こんなことしてる場合じゃなかったんだ……！！

有太、慌てて電話（家電・マイム）を掛ける。

有太、気持ち悪い動きでそわそわしている。

有太 あ、もしもし。福田さんのお宅でしょうか。はい、はい。あ、僕、樹恵理（ジュエリー）さんと生徒会で仲良くさせてもらっている細見、細見有太というんですけど、はい。はい。いやいやいやいや、そういうわけじゃないですよ。まあでもいづれ？ そうなるかもしれませんけどね……あ、はい。ありがとうございます。

有太、またそわそわ。

有太 あ、もしもし。樹恵理さん？ ちょっと話したいことがあって……。ほんとに学校で話そうと思ってたんだけど、樹恵理さんいくら探しても見つからなくて、ははは。あ、うん……。うん。そ、そうだね。じゃあ……。言うね。僕は……。細見有太は……。貴女のこと……。無理です！……。え？ 今無理って言わなかった？ うん、うん……。そうだよ、はは、あんだだけ叫んで聞こえてないわけじゃないね。……。ちなみに、何でも、無理なのか教えてもらってもいい……。見ればわかるでしょ……。何が……。あ、ああ……。だ、だよ……。……。こんなんじや（お腹を触りながら）そうだよ……。うん。ああ、いいよいいよ気にしないで……。というか、なんちゃって！ 冗談だよ冗談。ほんとだ。ちょっとからかってみただけ！ 早めのエイプリルフールっていうか、なんかそんな感じ。ほんとほんと。ほんとだから！……。だから、明日からいつでも通りでよろしくね。

有太、返事を聞く前に電話を切り、息を吐く。

亮太、上手側から、めっちゃ泣きながら登場。

亮太 うわ……。うん。

有太 亮太！？

亮太 ただいま……。！

有太 お、おかえり。

亮太 なにもきこえなかったよー！！！！

有太 絶対嘘だろ！！

亮太 兄ちゃん！

有太 はいはいなんだよ。

亮太 俺は兄ちゃんがどんなでも大好きだからなー！！！！（亮太に抱き着く）

有太 うお！……はいはい。……ありがとな。

亮太、ひたすら泣いている。有太の声は聞こえていない。

有太 ちょっとお前、落ち着くまで自分の部屋にいる。

亮太 こんな状態の兄ちゃんを一人になんてできないよー！！！！

有太 そんな状態のお前と一緒にいれないんだよ！！！！兄ちゃんもちよっと一人で考えたいんだよ。な？

亮太 兄ちゃん……！！

亮太、大きく頷いて部屋から勢いよく出て行く。（出際にグッドポーズを忘れない）

外から「ジュエリーちゃんって言うんだー！！！！」と涙交じりの声が聞こえる。

有太、亮太の背中を笑顔で見やった後に、戸に背を向けて電話を見つめて溜息をつく。

いつもの椅子に座ろうとするが、途中でやめて晴夫の椅子に荒く腰掛ける。頭を強く掻きむしった後に背もたれに大きく寄りかかって項垂れる。暫くボーっとした後、晴夫

が忘れて行った紙に気付く。なんとなくそれに手を伸ばし、思考の片手間に読み始める。

読んでいくうちに段々と目に熱が入っていく。最後まで読み終わると、手紙をほっぽり出して部屋から飛び出す。

暫くの間。

亮太、タオルで目元を拭きながら入ってくる。

有太 兄ちゃん。なんとか落ち着いたよ。……ってあれ？ 兄ちゃん？

亮太、部屋を見渡し紙が落ちているのに気づく。

有太 なんだこれ？

亮太、なんとなく読み始め、読んでいるうちに段々わなわなとしていく。

有太 に、にいちゃん！！！！

有太の叫びを切っ掛けに BGM

この瞬間この場はメタ的な抽象空間になる

亮太、机の上に飛び乗る。

有太、亮太が話し出したあたりから中央奥から登場。上下黒ジャージ。亮太のセリフに合わせてトレーニングをする。

亮太 この日から、兄ちゃんはダイエットを始めました。毎朝毎晩走り込み、毎日腕立

、腹筋、スクワットを百回。兄ちゃんは血反吐を吐く勢いで頑張りました。告白のこともあったんでしょうけど、きつと、この手紙のことがあったからだと思います。そのかいがあったのか兄ちゃんは――

有太、ふらつきながら中央奥からハケる。

亮太 がんばれ兄ちゃん！

有太（筋）、有太と入れ替わりで登場。センターでポーズ。

亮太 めちゃくちゃ痩せました。

暗転

明転

細見家のリビング。早朝。

いつもの様に晴夫、京、亮太が座っている。

京 ゆうたー！ りょうたー！ ご飯できたわよー！

階段を降りる音。

亮太が制服のジャケットを持ってリビングに入ってくる。

制服の下を履き、表に「細見」とプリントされたTシャツを着ている。

亮太 おはよう。お、この臭い！ 今日目玉焼きとお味噌汁だ！

京 何よ、「今日も」って。何か不満でも？

京、料理の乗せられた皿を小窓から亮太に渡す。

亮太、皿を運んでいつものところに座り、テレビの電源をつける。

京 有太は？

晴夫 ランニングだよ。いつもどおり。何があったのかね、ここ半年以上、人が変わったようにダイエットなんかして。

亮太 何があっただらうね。ははっ

京 まあでもいいんじゃない？ 何かに励むのはとってもいいことよ。

晴夫 ま、学業がおろそかになっていなかったら別に構わんけどな。

亮太 それは大丈夫だよ。兄ちゃん、定期試験の度に名前張り出されてるもん。

京 まさに文武両道ね。亮太も見習わないと。

亮太 お、俺だって色々頑張ろうとしてるよ。

晴夫 お、初耳だな。いったい何を頑張るつもりなんだ？

亮太 ……社会貢献だよ。

晴夫 ほー、社会貢献ね。

京 どんな社会貢献なの？

亮太 け、献血だよ。

晴夫 献血ね。

亮太 なんだよ！！ いいじゃんか！ 俺だって注射怖いのに勇気だしたんだから！

京 ちようどいいじゃない。ついでにいい血液型も見てもらいなさいよ。

亮太 え？ 献血って血液型とかも見てもらえるの？

京 知らなかったの？ っていうか血液型分からないまま献血するつもりだったの？

亮太 どうせ俺もA型だから別にいいかなって。

京 あんたは……。あのね血液型っていう——

亮太 あーもーわかったから！朝からお叱りは勘弁してよ！

京 ……もう。

亮太 あ！そう言えば。

晴夫 どうした？

亮太 俺の体重って大丈夫なのかな？なんか軽すぎると駄目みたいじゃん？

京 それぐらい調べときなさいよ。あんた体重何キロ？

亮太 50とちよつとだったはず。

京 そんなだけあれば大丈夫よ。

亮太 そう？ならよかった。

晴夫 いつ行くつもりなんだ？

亮太 明日。

晴夫 そりやまたえらい急だな。

亮太 明日うちに献血者が来るんだ。

晴夫 つで、ちよつどいいと思ったわけか。

亮太 そそ。…そういうえば父さんって献血とか行ったことないの？

京 なんて？

亮太 話し口的に母さんは行ったことあるんでしょ？なら父さんも言ったことあんなかって。

晴夫 ずいぶん昔に一回だけ。まあ、その時は献血できなかつたけどな。

亮太 僕でも行けるのに、父さんどんだけ痩せてたの！？

京 やせてたっていうか——

玄関のドアが開く音。

しばらくして、リビングのドアが開く。

有太（筋）登場。ジャージの上を腰に巻いて首にはタオルを巻いている。上は細身Tシャツ着ているが、明らかにサイズが合っていない。ぱつっんぱつっんで腹が見えている。

有太 ただいまー！いやー、本当は近くを軽く走るぐらいで済まそうと思ってたんだけど

ど途中で気持ちよくなって、隣町まで行っちゃった。

京 ……：…：…：…やっぱり痩せすぎよね。

晴夫 もう痩せるっていう段階ではないな。

有太 おお亮太！起きてたか。

亮太 おはよう。

晴夫 時間大丈夫なのか？

有太 今日は別に生徒会の仕事ないし、大丈夫。

京 ああ、そうだ。有太、ちょっと手伝って。
有太 ん？なめに？（朝食に手を伸ばそうとして、途中でやめる）
京 上の棚にあるお鍋とって。夜ご飯作るのに使いたいんだけど届かないの。
有太 はーい。

有太、キッチンの方に鍋を取りに行く

有太 どのなべー？
京 一番大きい。今日カレーだから。
有太 カレー！？やった！！
京 あんたカレーの度にそれ言ってるわね。あ、それ、その鍋！
有太 え、これ？
京 違う違う、その横。
有太 これか。
京 違うって、その右！

亮太、テレビの音が聞こえずにイライラしている。

有太 え、じゃあこれ？
京 だから違う！！ あんた馬鹿なの！？ こないだも言ったじゃない！！
有太 うるさいな！！ てか、この前も言ったけどそもそも何で自分が届かないようなところ直してんの！
亮太 さつきからうるさい！ テレビの音が聞こえないじゃん！

亮太、小窓を開ける。
そこにはちょうど有太のムキムキのお腹が。

有太 そんなこと言ったってしょうがないだろ！ どこにあるかわかんないんだから！（しゃべりに合わせて腹筋を動かす）
亮太 にしてももう少し静かにやれるだろ！
有太 棚の中に頭突っ込んでるから声張らないと聞こえないんだよ！（しゃべりに合わせて腹筋を動かす）
亮太 知らねえよ！ こっちはテレビみ——腹筋動かすのやめろよ！ イライラする！！

有太 あ！ あった！ これでしょ！？
京 そうそう！ これこれ！ いやー助かったわ。

有太 どういたしました。

京、不思議そうな顔をする。

ここから一連の会話、亮太は有太に変な気を遣う。

有太 ん？ どうしたの？

京 あんたそういえば携帯欲しいって言わなくなったわね。

有太 あーなんか別に要らないかなって。

京 欲しがらなければ欲しがらないで、それはそれで物足りないわね。

有太 なんだよそれー

晴夫 欲しがらないのはいいことだ。安あがりだし。………そういえばTシャツの文句も言わなくなったな。

有太 あーそれ？ それはさ、最近漸くこのTシャツの良さが判ってきたっていうか、なんてーの？ なんかこっぴड़かしい話なんだけど、「家族の絆」みたいなのが収斂されてるっていうか。

晴夫 おお！！ 有太もついに分かったか！ このTシャツのよさが！！

京 亮太は？ そういえば亮太もいろいろと言わなくなったわね。

亮太 ああ僕？ 僕はー、あれだよ、学校で兄ちゃんを見ているうちに自分もしっかりしなきゃなあって思ったの。

京 へえ……

亮太 あ！ 血液型占いやってるよ！

晴夫 お！ A型は何位だ？ 今日はいいい日だ！ きっと一位だろ！

有太 ……あー最下位だ。

亮太 うわー朝から縁起悪いな。

有太 だから、お前はまだ血液型わかんないだろ。

京 あーそうだ。それがね有太。亮太、ついに血液型検査するんだって。

有太 え？ まじで？

亮太 マジだよ。まあ、献血のついでだけどね。

有太 献血？ お前、注射苦手だったよな。

亮太 いいかげん克服しないとって思って。

有太 へえ。まあ、がんばれよ。

亮太 なんか適当。

有太 たかが献血だけで大袈裟に言う方がおかしいだろ。

亮太 それもそうだね。

京、早めにご飯を食べ終わり、台所に食器を持っていく

京 きゃー!!!

晴夫 ！！どうした京!?

京 ご、ゴキブリ!!!

晴夫 ゴキブリだと!? 任せろ!!! 京!

晴夫、台所に向かって突撃する。

晴夫 あ! そっち逃げたぞ!

ゴキブリが台所からリビングに逃げてくる。

全員てんやわんやしている。どさくさで場転。晴夫、京はハケる。

ここは学校の3年の教室。

授業終わりのチャイムの音。

椅子には有太と樹恵理が座っている。

有太 起立。気を付け、礼。ありがとうございました。

有太、帰りの支度をする。仕度の途中で樹恵理に話しかけられる。

有太 ん? どうしたの? 今日俺掃除当番なんだけど。え? あー、もういいよ。あの時のことは。しょうがないでしょ。だーかーらー、気にしなくていいって。

有太、樹恵理にラブレターを手渡される。

亮太、ちようどいいタイミングで教室に入ってくる。

亮太 兄ちゃん、献血の時間まで暇だから遊びに来たよ

亮太、空気を察して息をひそめる。

有太 え? これって……。……。そんな急に言われても……。いや、確かに急ではないけど——あつ……

樹恵理、教室から出て行く。

有太、亮太に気付く。

ここに幾つかギャグを入れたい。エチュードで探る。(後で削除)

有太 おお、亮太。来てたのか。

亮太 ……ああ、献血までの時間をつぶそうと思って。っていうか、兄ちゃん。今の…

有太 ああ、これ？ 気にすんな。

有太、
ラブレターを破く。

亮太 あー！何してんの！？もったいない！

有太 いいのいいの。そんな珍しいもんでもないし。

亮太 え？兄ちゃん普段からそんなにラブレターとかもらってんの！？

有太 痩せてからは、結構。

亮太 まじかー！そう言えば最近上級生から兄ちゃんのこと聞かれてた気がする。あれ、俺に声かけてたんじゃなかったんだ…

有太 そんないいもんじゃねえぞ。俺が痩せてから急に態度を変えやがって。

亮太 あー、やっぱり痩せたらそういうのって結構変わるんだ。

有太 結構どころじゃないからな。みんな見かけで判断しやがって。樹恵理さんだってそうだ。あの人は違うって思ってたのに、俺が痩せたとたんにこんなもの渡してきて。

亮太 それは思った。樹恵理さん…だったっけ？兄ちゃんが太ってた時は、あんな雑にフツたくせに、まあ、詳しいことは知らないけど、兄ちゃんが痩せたら掌返しみたいにあんな感じになって。見かけばかりで中身を全然見てないんだ。兄ちゃんいいよあんなの気にしなくて。そんな人たちより、前からの友達を大事にしなよ。あの入学式の時に話してた人とか。

有太 翔馬（ペガサス）くんのことか？

亮太 ペガサス君って言うんだ…。とにかく、そういう、昔からの友達と付き合いようにしたら？

有太 それは、そうだな。

間。

有太 ……なあ、亮太。

亮太 どうしたの？

有太 もし、もしだぞ？俺とお前が家族じゃないってことになったら、どう思う？

亮太 どういうこと？

有太 例えば、俺とお前が。血がつながってないってことになったらさ。そうなったら

亮太 あの手紙のこと？

有太 ……！知ってたんだな…。

亮太 あんな解り易い位置にほっぽり出してたんだもん。そりや気付くよ。

有太 ……そうか。

亮太 「私の息子へ。たとえ血が繋がっていなくても、他の子の様に、あんたは私の家族です。」短い文だったけど、確かにそう書いてあった。多分母さんが書いたんだろうね。

有太 それを読んで、どう思った？

亮太 最初はびっくりしたよ。それで、しばらく考えて…、まあどうでもいいかってなった。

有太 え？

亮太 母さんがだって書いてたでしょ？血が繋がってなくても家族だって。多分そういうことなんだよ。お互いが相手のことを家族だって思えば、それはもう家族なんだ。

亮太 兄ちゃんだってそう思ってるから、僕に打ち明けてきたんでしょ？

有太 ……

亮太 ……兄ちゃん、俺もう行くね。もうすぐ時間だから

有太 亮太！

亮太 ん？何？

有太 俺、今日父さんたちと話してみるよ。このこと。今までなんか気まずくて言えなかったけど、なんか今なら言えそうな気がする。

亮太 そっか。頑張ってる。

亮太、教室から出て行く。

有太 ……掃除するか。

有太、教室の掃除をする（マイム）。掃除していくうちに、段々と細見家のリビングの間取りになる。一息つくど、その瞬間ここは細見家のリビングになる。

有太、座りの悪い様子。間が持たないのかテレビをつけてボーっと眺めている。

しばらくしてから、上手側から亮太が登場。

亮太、手には封筒を持っている。どことなく元気がない。

有太 お、おお。お帰り。（テレビの電源を落とす）

亮太 たいま。

有太 どうした。何か元気ないぞ。…あ！あれか、献血か？流石に急に克服しろったって無理な話だったか。まあ無理もないよななんてって——

亮太 兄ちゃん。

有太 な、なんだよ。そんなに嫌だったのか？ 献血。でも、お前がやるって言ったんだからn——。

亮太 兄ちゃん！！

有太 なんだよ。

亮太 もし、もしだよ。俺と兄ちゃんが家族じゃないってことになったらどうする？

有太 なんだよ。その話ならさっきしただろ？ 俺たちは血が繋がってなくても家族だつて。俺と亮太。俺と母さん。俺と父さん。血は繋がってなくても家族だと思ってるなら、俺たちは家族だ。

亮太 それね、間違いだったんだ。

有太 なんだよ、お前が言ったんだろ。お互いが家族だと思えば家族だ——

亮太 違うんだよ！ 間違いってのはそこじゃないんだ！

有太 じゃあ、どこなんだよ。

亮太 血が繋がってないのは兄ちゃんじゃないんだ。

有太 は？

亮太 だから、血が繋がってないのは俺だったんだって。

有太 …いや、なんだよ急に。何の根拠があるんだよ。よく考えてみるよ。父さんと母さん亮太と俺。俺だけ体型違うじゃん。太ってた時は勿論だけど、痩せてからも、ほら、全然違うだろ？ これで血が繋がってるつてのは無理があるだろ。

亮太 血が繋がってほしくないのかよ！ …根拠もあるよ。

有太 なんだよ根拠って。

亮太 これだよ。(封筒を掲げる。)

有太 なんだよ、それ。

亮太 献血の時にして貰った血液検査の結果の写しだよ。

有太 そ、それがどうかしたのかよ。

亮太 違ったんだ。

有太 何が。

亮太 血液型だよ。俺の血液型、父さんと母さんからじゃ絶対に産まれない血液型だったんだよ。

有太 …マジか。

亮太 はは、間抜けでしょ？ あんなに兄ちゃんに「血が繋がってなくても家族だ」って言ってたのに、言ってる本人の血が繋がってなかったんだから。

有太 …いやそれは——

亮太 ねえ兄ちゃん。なんで、俺あの手紙だけで血が繋がってないのが兄ちゃんだって、思ってたんだろうね。

有太 それは——

亮太 きっと、見かけなんだろうね。俺、樹恵理さんのことなんも悪く言えないや。見かけだけで家族じゃないって言っちゃったんだから。

有太 お前、家族だって言ってたじゃないか。

亮太 あれだって、今となっちゃ本心なのか怪しいよ。きっと自分に血が繋がってるから言えたんだ。立場が変わったらわかる。その点兄ちゃんってすごいよね。

有太 何がだよ。

亮太 こんな辛いのにあんなふうに平気そうに振る舞えてたんだから。

有太 俺だって別に平気じゃなかったよ。

亮太 平気そうに振る舞うだけで凄いだよ。こんなの俺だったら耐えられないよ。

有太 ……

亮太 ……ねえ。

有太 なんだ。

亮太 俺、どうしたらいいんだろ？俺、この家にいていいのかな。

有太 何言ってるんだよ。いて良いに決まってるんだろ。

亮太 兄ちゃんも考えたはずだろ？血の繋がりのない自分はこの家にいたらいけないんじゃないかって。

有太 ……

亮太 あー…、もう駄目だね、俺。考え方が変な方向に行っちゃってる。とりあえず、部屋戻って、落ち着いてくるね。

亮太、 部屋を出て行くこうとする。

有太 まてよ。

亮太 ……どうしたの？

有太 いや、なんか…。今ここでお前に行かせたらなんか遠くに行ってしまうんじゃないかって思ってる。

亮太 ……俺だってまだ高校生だよ？卒業するまでそんな簡単に家は出て行かないよ。

有太 そういうことじゃなくて！亮太、このまま放っておいたら、なんか家の中で一人つきりになるだろ！？

亮太 そんなこと言ったって、兄ちゃんが一人にしてくれないだろ？

有太 だから！違うんだって！どんなに俺が近くにいても、お前、心の中で一人になっちゃうだろ！

亮太 なんでそんなのわかるんだよ。兄ちゃんに何が解んだ——

有太 わかるよ！！俺だってお前がいなかったら、あの手紙を読む前にお前がいてくれなかったら、そういう風になってた！

亮太 兄ちゃん。

有太 なあ、あの手紙を読んでから今までの俺と、今のお前の違いはなんだ！？ 体重か筋肉か脂肪か見た目か！？ 気持ちか！？ 心か！？ ……それとも血か？

亮太 それは…

有太 無いだろ！ 違いなんてないだろ！？ ……俺と亮太に違いなんてないだろ！？ ……なあ、頼むから家族じゃないなんて言うなよ。ついさっき俺を励ましたその口で、「家族」だって言ったその口で、家族じゃないなんて、言わないでくれよ。

亮太 ……俺の気持ちは——

有太 お前の気持ちなんか絶対に考えない。(笑いながら) ざまあみる。お前がどんなに嫌がっても、俺はお前が家族だって思い続けてやる。

亮太 にいちや——

有太 うるさい！ お前が何と言おうと、見かけが全然似てなくても、血が繋がってなくても！ お前は俺の弟だ！！

(一連のセリフは役者の役作りの程度解釈によっては変更※見直しの段階でこの文章は消す)

有太、息を荒げている。

亮太、大きな声で笑いだす。ひとしきり笑った後に泣き出す。

有太 ……亮太？

亮太 ……ばかみてえ。

有太 え？

亮太 なんだよそれ。無茶苦茶じゃん。無茶苦茶じゃん…

有太 亮太…

有太、亮太を抱きしめて背中を擦(さす)る。

暗転

しそうなところで、晴夫が入ってくる。

何かを察した顔で端により、京に電話をする。

晴夫 もしもし、京か？ 落ち着いて聞けよ？ 有太と亮太が、体を求めあってる！

有太亮太 おい！！！！

亮太 空気を読んでくれよ！

有太 いま、大事な話をしてたんだ！！

晴夫 聞こえたか京！？ 二人で大事な話を——

有太　　そういう意味じゃねえって！ ああもう……！ 亮太！！ もう話すぞ！？

亮太　　いや兄ちゃん、いい。俺が話す。

有太　　大丈夫なのか？ こんなすぐに。

亮太　　今じゃないと駄目な気がする。

晴夫　　お？ どうしたんだ？

亮太　　父さん。大事な話があるんだ。

晴夫　　おお、奇遇だな。父さんも話があったんだ。

亮太　　あのね、父さん。僕——

晴夫　　いや、先に父さんに話させてくれ。あのな——

有太　　亮太と父さんの話は同じ話だと思うよ。だから、亮太に話をさせてあげて。

晴夫　　おお、なんだ。二人とも知ってたのか。…分かった。亮太、二人で同時に言おう。

有太　　いや、そんな感じで済ませて良い話じゃ——

亮太　　いや、それでいいよ。父さんにも考えがあるんでしょ。

有太　　亮太……

晴夫　　お、いいみたいだな。じゃあ行くぞ。せーの

亮太　　俺は血が繋がってないんでしょ？

晴夫　　父さん、昔太ってたんだ。

有太亮太　　え？

晴夫　　え？

晴夫　　亮太、今なんて言った？

有太　　父さんこそ、今なんて言った？

晴夫　　いやだから、父さん昔太ってたんだって。それこそちょうど、前の有太と同じくらいに。

有太　　いやいやいやいや、絶対嘘だ。

晴夫　　いや、嘘じゃないって。ほら（ポケットの中から写真を出して見せる。）

中央奥から昔の晴夫（有太（太）との兼ね役）登場

亮太　　太ってる時の兄ちゃんにそっくりだ！？

晴夫　　いままでどことなく恥ずかしくて言えなかったんだけど、今朝の有太の話を聞いていいかげん話さなきゃいけないと思って。…ていうか、どういうことだよ。亮太、さっきの話。

亮太　　いやだから、俺は血が繋がってないんでしょ。

晴夫　　何を言ってるんだ。いったいどっからそんな話が出た？

亮太　　今日行った献血で調べてもらったんだよ。

亮太、晴夫に封筒を渡す。

有太、晴夫の後ろに回り込んで封筒の中身を覗き込む

昔の晴夫、同じように覗きこむ。

有太 お前はここにいちやダメだろ。(押し返す)

昔の晴夫、中央奥からハケる。

晴夫と有太、読んでいくうちに頭を抱える。

亮太 そう、僕はO型だったんだ。父さんと母さんはA型。だから俺は――

晴夫 あー亮太、お前、理科の勉強は好きか？

亮太 どうしたの急に。あんまり好きじゃないよ。

有太 AO型って知ってる？

亮太 馬鹿にしないでよ。そんな血液型あるわけ無いでしょ。血液型はA、B、AB、Oの4つしかない。

有太、頭を押さえる。亮太に血液型について教える。

有太 ―――つまり、両方ともA型でもO型の子供は生まれるってこと。

亮太 まじで！？じゃあ、父さんと母さんは…

晴夫 二人ともAO型だ。

亮太 え…ってことは。

有太 お前の血が繋がってないとは限らないってことだよ！

亮太 でも、そしたら。

有太 ああそうだ、俺たちのどっちの血が繋がっていないのか、分からないってことだよ！

晴夫 あー盛り上がってるところ悪いんだが。

有太 なんだよ父さん！…！！そうだ！もういっそのこと、父さんに直接聞こう。そ

っちの方がってとり早い！

亮太 そうだね。

有太 父さん――

晴夫 繋がってるぞ。

有太 え？

亮太 え？

晴夫 だーかーらー、繋がってるって！有太も亮太も。第一いったいどこから、どっちかの血が繋がってないなんて話になったんだ。

有太 手紙だよ。父さんが入学式の日に読んでた手紙。

晴夫 手紙？ ああ、これのことか。（懐から手紙を取り出す。）

有太 そうだよ。それぞれ。母さんからのその手紙を見て、俺たちはその話になったんだ。

晴夫 何言ってるんだ？ これはお義母さんからの手紙だぞ？

有太 だから、母さんだろ？

晴夫 ちがう。義理の母と書いて母さんだ。簡単に言うと京の母親だな。

有太 え？ どういうこと。

晴夫 父さん実はな、京側の実家とあんまりうまくいってなかったんだよ。だから、亮太の入学を機に親交を深めようと一筆したためたんだ。それで、その返信の手紙が、この手紙ってわけ。

亮太 え？ ってことは、

有太 俺たちのこの半年間って、まったくもって無駄だったってわけ？

晴夫 なんだよお前ら、ここ最近様子がおかしいと思ったらそんなこと考えてたのか！
いいからお前ら、家族ってのはな、たとえ血が繋がっていなくても――

有太 ああ、そのくだりならもうやった。

晴夫 なんだよ！

二人とも椅子にへたり込む。

有太 ……なんか、疲れたな。

亮太 ……そうだね。

暗転

こは閑静な住宅街にあるごく普通の一般家庭『細見家』のリビング。

ここでは晴夫が新聞を読んでおり、京が小窓を閉じた向こうで料理をしている。

二人とも白ベースのTシャツと黒ジャージの下を着ている

京、小窓を開けて有太と亮太を呼ぶ。

京 ゆうたー！ りょうたー！ ご飯できたわよー！

階段を降りる音。

亮太が制服のジャケットを着てリビングに入ってくる。

亮太 おはよう。お、この臭い！ 今日目玉焼きとお味噌汁だ！ おれ、これ大好き！！

晴夫 いつも同じだろ。

亮太 いつも同じだからいいんじゃない。なんか安心して。

階段を降りる音。

有太が制服のジャケットを着てリビングにおりてくる。

有太 おはよう。

晴夫 お、有太。最近やけに早くリビングに来るな。

有太 ここ最近は何もトレーニングの気分になれないからね。

亮太 あんだけのことがあればね。

京 あんたたち聞いたわよ。こないだのこと。(台所から)

亮太 あれは、紛らわしい父さんたちが悪いよ。こっちはめっちゃくちゃ焦ったんだからね。

晴夫 人の手紙を勝手に読む方が悪い。

亮太 それはそうだけど。

有太 ま、俺は別に血が繋がっていなくてもよかったけどね。家族は家族だし。

亮太 兄ちゃん……。そうだね。

笑いあう二人。

京 きゃー！！

晴夫 どうしたみやこー！！

京 ま、またゴキブリー！！

晴夫　ゴキブリだと！？　任せろ！　京！！

晴夫、台所に突撃。

晴夫　よし、かかってこいゴキブリども！！　今度こそ年貢の納め時だ！！　つてう
お！！　凄い数だ！！

亮太　前の奴逃がしたからでしょ！

晴夫　ちよ、ちよつと有太、亮太！！　こっち来て助けてくれ！

有太　はあ。…亮太。

亮太　えー、もう。しょうがないな。

有太と亮太、上着を脱いで体を解す。
ふたり、途中で目が合い、笑いあう。

京　は、早く来てー！

有太　はいはい。

亮太　わかったよー。

この時初めて二人の背中が見える。
背中には「家族」と書いてある。

今週のお題は――

いつの間にか流れていたBGMと共にフェードで暗転。

【完】